

受験とその先

私は、小学生の頃から「医療従事者になる」という漠然とした夢を抱きつつも、どんな医療従事者になりたいか、どのようなところで活躍したいかなど具体的に考えていなかった。高校生になって、先輩たちのプレゼンテーションで興味を持ち、復興支援団体「ならふく」に入った。それが今の自分の選択に大きく影響している。災害に関する知識を蓄え、福島の高校生とディ

スカッションをしたり、実際に東日本大震災の被災地へ足を運んだり、学校で避難所運営ゲームを実施したりと、災害を身近に感じられる機会が沢山あった。「ならふく」でのそういった活動を通して、徐々に「災害などの緊急時に地域を支えられる医療従事者になりたい」と思うようになった。

進路選択の際、近畿圏の国公立大学で特に地域医療に力を入れている、そして入ってからの将来の選択肢が多いという点を重視し、京都府立医科大学を目指すことにした。合格のチャンスを広げるために推薦入試を受けようと決めてか

らは、評定平均のボーダーを超えられるよう、学校の定期テストや提出物はしっかり頑張るようにした。とは言っても、まずは一般入試のための勉強をしなければならない。京都府立医科大学の看護学科は共通テストの比重が非常に大きかったので、コロナで設けられた休校期間では、苦手だった理数科目の基礎固めに徹した。推薦入試の勉強は10月頃から始めた。私は塾にも通っていなかったなので、対策はすべて学校頼りだった。特に苦労したのが志望理由書だ。多くの大学の志望理由書は800字を超えるものが多い。私の目指すと

ころはたった 400 字だった。その少ない字数の中で、周りに埋もれずに自分の伝えたいことを書くのは、決して楽なものではなかった。先生に見てもらい推敲を重ね、自分自身の経験や学びたいことを大学の特色にうまく絡めて書くことができた。小論文は、新聞や医療記事を読んで情報収集をし、過去問を解き、先生に添削してもらおうという繰り返しだった。緊張で頭が真っ白になってしまうほど苦手だった面接も、何度も練習し、初めての質問にも自分なりに答えられるようになった。試験当日、過去問とは違った形式の問題が出たり、面接

で予想外の質問をされたり、戸惑うことが多かったが、自分のやってきたことを思い出して全力を尽くし、なんとか合格することができた。

受験生活の中で、コロナによるインハイ中止で勉強する意欲すらなくなってしまうことや、推薦と一般の勉強の両立がしんどくなることもあった。そんなときにはいつも、大学に入ってからのこと、受験の先のことを沢山思い描いた。間違いなく「ならふく」でのあの貴重な経験がモチベーションの原動力になっていた。ありがたいことに、奈良女子大付属には生徒一人一人に何かに挑戦できる場がある。新し

いことに出会える機会が沢山ある。
思いがけないところで自分のやり
たいことが見つかるかもしれない。
自分が少しでも興味を持ったこと
に全力になってほしい。

最後に、放課後遅くまで試験の
対策をしてくださった先生方、部活
引退の場を設けてくれた後輩、ア
ドバイスをくださった先輩、落ち込
んでいるときいつも励ましてくれた
友人や家族、沢山の人の支えがあ
って私は受験を乗り越えることが
できました。本当にありがとうございました。
いました。

